

宇奈岐日女神社と大杵社

二宮修二

はじめに

由布市湯布院町には、由布院盆地の美しい自然の中に豊かな水と光に恵まれた大杉林と美しい清水のわく社地を持つ宇奈岐日女神社がある。また、宇奈岐日女神社の末社でもある「大杵社」がある。この社には、国指定の有名な大杉がある。この宇奈岐日女神社がどうかたちで創建されたのか。という歴史を経て維持されてきたのかを調べていきたい。

一、大分県地名事典の記録から

①所在地は、由布市湯布院町川上、宇奈岐日女神社

②由布院盆地の南東にあり、祭神は国常立尊ほか五柱。

旧県社。

別名六所宮・六所様ともいい、「豊後国志」には「土人称六所権現」とある。また「太宰管内志」に「木綿山ノ神社とも云うなり」とあり、木綿大明神の俗称もあった。（豊後国志）かつては北温湯村の仏山寺が別当寺。社名に関連する「うなぐ」とは勾玉などの装飾を意味し、ウナグヒメとはこのような飾りを首にかけている巫女であり、この地方の女首長であろう。ウナグヒメは農業神。水神に仕える巫女ではなからうか。神に仕える土地の首長が神そのものに転化したものと考えられる。才神はじめウナグヒメ神の一神であったのが

後六神を祀るようになったと思われる。湯布院の総産土神として中川の字「ナベクラ」の地、蹴破った谷間を真下に見下ろす所に。当神社の末社として蹴裂権現社が祭られている。「宇奈岐日女神」は嘉祥二年（八四六）六月從五位下を授けられ（続日本後紀）元慶七年（八八三）年九月二日に正五位下に昇った（三代実録）。「延喜式」神名帳には速見郡三座の一として「宇奈岐日女神社」が登載されている。大友義鎮から四月十六日付で杵原八幡宮の大宮司宛に出された書状によると杵原宮造宮にあたっては油断なく準備をし、本社使用の材木は「椿原六所」において採用するので造宮奉行に申請するようにとある。梅雨以前に具体的にどの木を伐採しそれをどう運ぶか取り調べるのが肝要であるとしている。

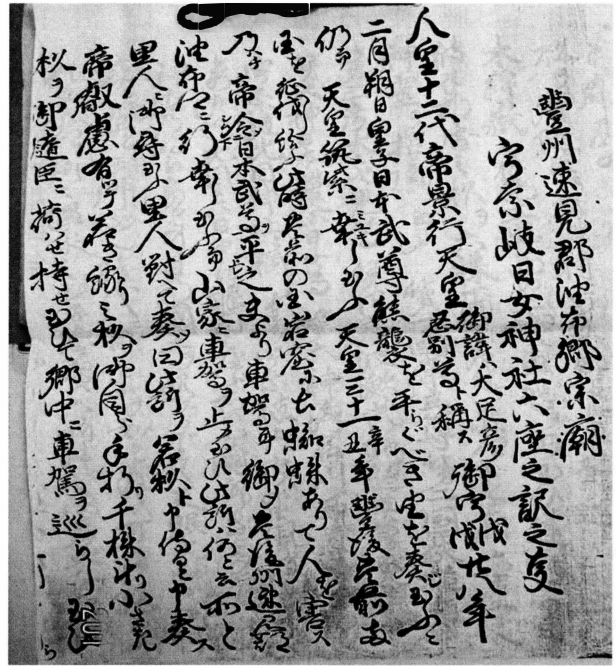
宇奈岐日女神社の由来

宇奈岐日女神社は、由布市湯布院町にある神社で式内社で旧社格は県社。「六所宮」と呼ばれるほか、「木綿神社」「木綿山神社」と呼ばれることもある。地域の人は六所宮と呼んでいる。「木綿」の木は、由布山にあり低木で母円形である。その幹の皮をはいで繊維にしていた。

祭り神・こくとしにたつのみこと国常立尊・くにさつちのみこと国狭槌尊・ひこほ彦火火出見尊・みみこと彦波なぎ武たけうがふきあえずのみことや葺不合尊・かむいわよひこのみこと神磐余彦尊・かんなめながわみのみこと神淳名川耳尊

創建・伝、性空上人が由布岳を守る祠を造った。後に宇奈岐日女神社と習合

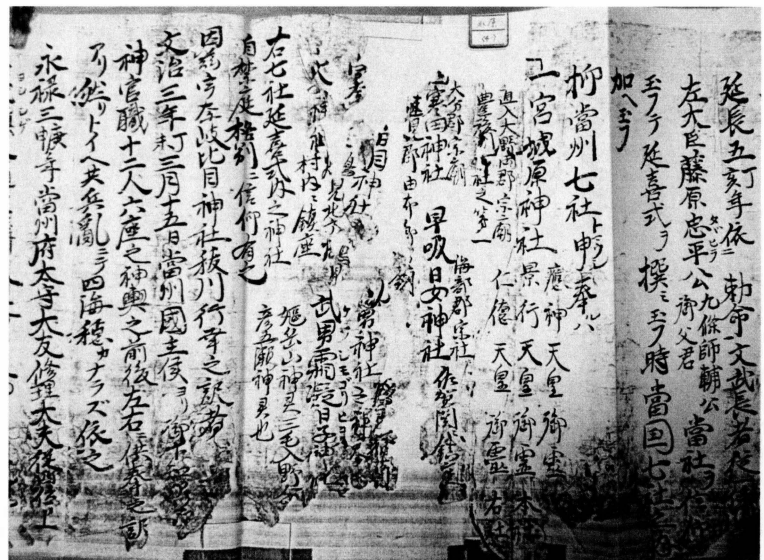
・第一二代景行天皇十二年（宇奈岐日女神社文書）



湯布院町 宇奈岐日女神社資料①

豊州速見郡油布郷内 宇奈岐日女神社

十二代帝景行天皇 御諱ハ忍別 大和尊
 日皇子日本武尊熊襲を
 天皇築紫に幸し玉ふ天皇
 □し給ふ此の時 豊前の国岩窟に
 帝令日本武尊ヲ平上之夫れより車
 門内に行幸し玉ふ而山家二車駕二而
 御尋ね玉ふ里人対へて曰く
 微慮有りて若き緑の杉
 御切ご随臣二持たせ玉ひて郷に



【口語訳】

延長五年丁亥年勅命に
 よつて文武長者第一位
 左大臣藤原忠平公、九
 条師輔公御父君當社を
 信仰
 玉ふて延喜式を選び玉
 ふ時當国七社の内加へ
 給う
 一宮 城原神社
 応神天皇 御霊山
 景行天皇 御霊木仕
 直入大野両郡宗廟
 仁德天皇 御霊 右社
 豊後神社の第一

海部郡宗社
 大分郡宗廟 速吸日女神社 佐賀関
 上寒田神社
 速見郡 由布郷
 右七社延喜式内の神社 姫岳山 神具三毛入野
 彦岳願神具也
 自禁庭格別二有之

因幡宇左岐比目神社 祓川行幸之訳者

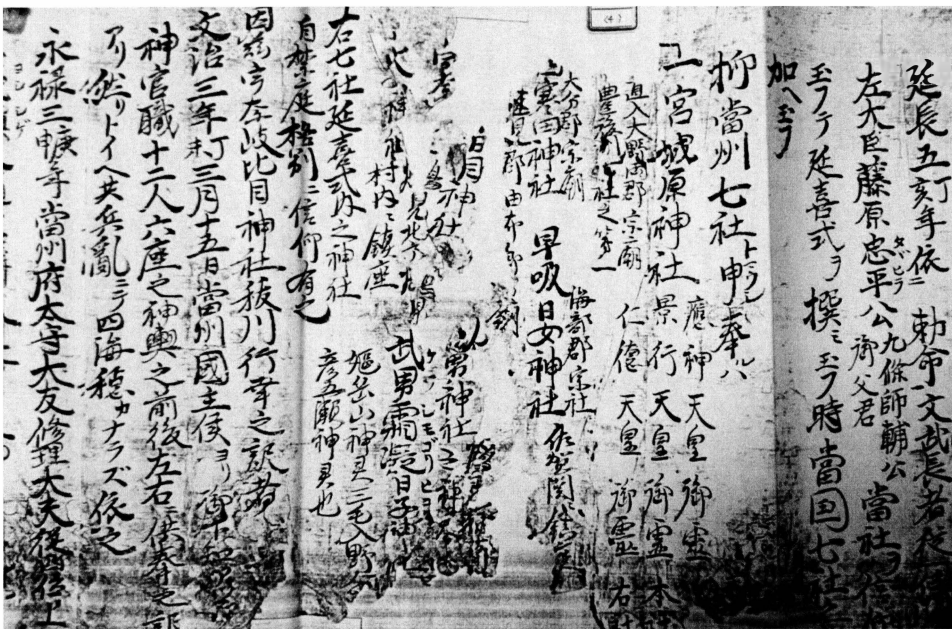
【説明】この文書は、宇奈岐日女神社にあつたものを湯布院町が複写したもので写真は明瞭でないところはあるが、資料から読み取れるものをあげていくと次のようになる。創建は、延長五年（九二七年）に、左大臣藤原忠平公の父が此の宮を信仰した。その時延喜式に七社をいれた。その中に入っているのは、城原神社 速吸日女神社 寒田神社 他に大分郡宗廟・直入大野郡宗廟などが書かれている。また、速見郡由布郷とあるので、宇奈岐日女神社をこれに加えているのだと考えられる。創建とは直接関係ないが湯布院の伝承では、由布山を崇める神として宇奈岐日女があり、由布山と由布院盆地を治めたと言われている。金鱗湖の近くにある仏山寺は、以前は由布山の中腹にあり、ともに人々の信仰の対象となっていた。

【伝承】「宇奈岐日女と蹴裂権現の伝承」

むかしむかし、今の由布院盆地には、大きな湖だったそう。宇奈岐日女の神は、家来の蹴裂権現を連れて湖の周りをまわっていた時、神は、湖を見て、この大きな湖がなくなれば湖の底にはきつとよく肥えた土地があるそこで米を作ればたくさん米ができるだろう。「権現よ。お前は国一の力持ちだ。向こうの岸をけって破って水を出したらいいと思うので、向こうの岸を力いっぱい蹴ってみよ。」と言うと権現は岸を力いっぱい蹴ると水は滔々と流れ、大分川となり湖の底が現れ、米づくりをして沢山の農産物ができるよう

になった。

資料② 「宇奈岐日女神社文書」



【口語訳】この資料

は由来に関する文書ではないが、神輿についての記録

源義鎮入道使い

の命により神官、

□地頭

之面々御神輿守護の旨六座の神輿三殿に一つの

神輿の前後左右、

四人宛奉供奉守護

□その人々

次の通り

八ッ川上馬場地頭神官、奴留湯左馬之助、由布惟温はる

乙丸地頭神官、衛藤河内守 後 藤原秀訓のり

並柳地頭神官、溝口伊豆守 前 藤原康順ゆき

石丸地頭神官、田中大和守 清原正雄

温湯地頭神官、大野九郎左衛門尉 大神惟辰とき

東畠山野口ねじ山地頭神官、矢野民部太輔前河内守清原兼匡

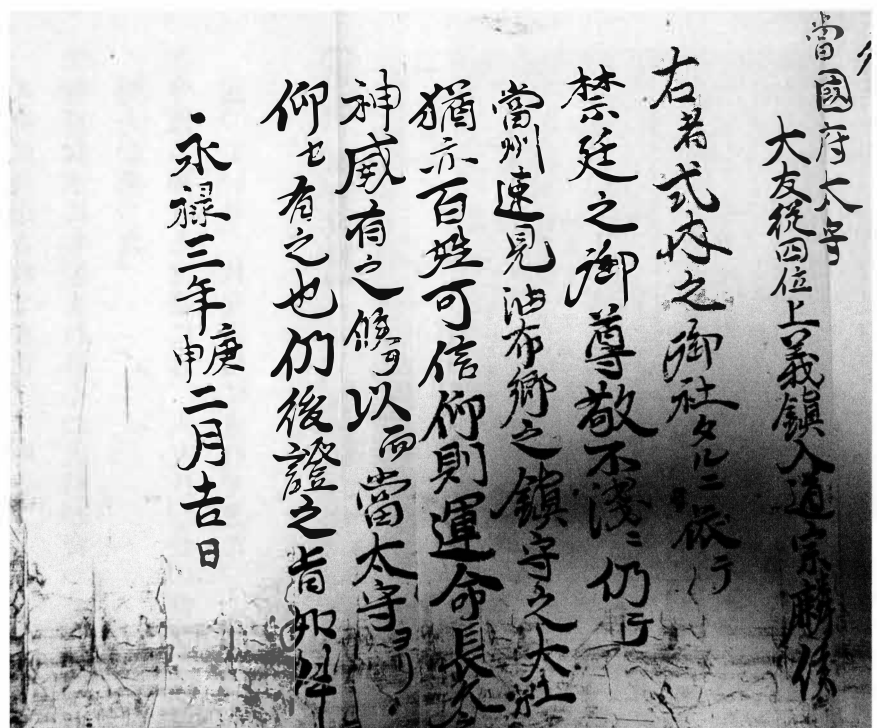
上之原地頭神官、右田平左衛門尉 清原正徳なか

乙丸野田地頭神官、加藤源之丞 藤原信篤

石丸地頭神官、後藤兵庫之介、藤原忠治

【説明】資料②この資料には、大友宗麟の命により、湯布院地区の各地地頭に、神輿の前後左右を守るために四人の地頭が守るよう命じられている。この役に各地区の地頭九人が命じられていることは、この祭りが大切にされていることがわかる。この地頭の中に、川上の地頭、奴留湯左馬之助が命じられている。奴留湯左馬之助は、大友氏が宮崎での高城耳川の戦いに参加して薩摩との合戦に参加し苦戦を強いられ命からがら帰ってきた記録がある。また奴留湯氏は、キリスト教の布教に積極的であったそのため、由布院には多くの信者ができ教会も置かれた。現在もキリシタン墓九五〇基ほどが確認されている。県指定の並柳キリスト教墓碑群もある。

資料③ 「宇奈岐日女神社文書」



【口語訳】當

国府太守、

大友從四位

上義鎮入道

宗麟侯

右者式内

之御社タル

二依りテ

禁廷之御

尊敬不淺二

仍テ

當州速見由

布郷之鎮守

大土榮

猶亦百姓可

信仰則運命

長久令

神威有之候ヲ以而當太守ヨリ

仰セ有之也仍て後証之旨 如件

永禄三月一日から年庚申 二月吉日

【説明】永禄三年は、一五六〇年で大友義鎮（宗麟）の三〇歳の時

のことである。大友宗麟は当国の太守である。此の宮は式内社であるので尊敬浅からず、由布郷の大地地を鎮守、百姓信仰すべし、則ち運命長久せしむ、此の宮は、神威があると太守は言われた。後症のためこれを記す。

二、宇奈岐日女神社の杉林とその被害

① 一九八〇年の調査

杉の幹の大きさ、五〇一cm以上一〇本・301cm～五〇一cm
三四本m・一五〇～三〇〇cmは二三本・六〇cm～一四九cmは九五本、この中には大分県指定木が二本ある。

② 文禄五年（一五九六）七月一日から連日大地震があり、

七日の大風雨で椿山が崩れ、馬場・八川両村が埋まった。

この時石松にある高全員も倒壊したが六所宮でも相当な被害があった。

③ 嘉永三年（一八五〇）八月七日には大暴風雨で六所宮の大杉が倒れた。

④ 平成三年（一九九一）の台風一九号でも多くの大杉が倒れる被害があった。この時被害にあつて倒木下杉の大木は現在神社の境内に大切に保存されている。

三、「大杵社」は、宇奈岐日女神社の末社ではあるが、昭和九年に

日本の天然記念物に指定された大杉がある。樹高・三七m、根回り二五、五m、幹回り十、六m、樹齢・千年を越える。

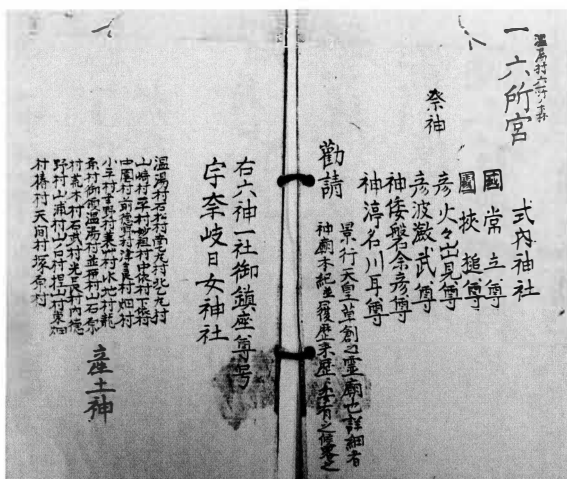
まとめ

① 宇奈岐日女神社の由来は、宇奈岐日女と呼ばれた巫女を祭ったもので嘉祥二年（八四九年）六月に従五位下を授けられた（日本書紀）ことからこれを創建年と考えてよいのではないかと考える。この時代から由布山の神また湯布院盆地を守る神として人々に尊崇されてきた。

② 豊富な水にも恵まれ多くの大杉が育っている。杉を守る人々の努力があった。

③ 今残る神社も文書には、大友氏が此の宮を大切に守るよう書き送っている。代々大切にされてきた。

【追加、参考資料】



【参考資料】

- ① 湯布院町誌
- ② 宇奈岐姫神社文書
- ③ 大分県地名事典
- ④ 由布市文化財記録
- ⑤ 神社明細帳